

道徳の時間の評価の在り方と工夫

教職研修係長 島 恒 生

Shima Tsuneo

要 旨

道徳教育や道徳の時間における評価は、子どもの成長を見守り、支え、励ますものであり、受容的な姿勢で共感的理解を大切にしながら進めていきたい。特に、道徳の時間では、ねらいを子どもの意識で考えること、「評価のポイント」や「更に考えを深めさせたい子どもへの支援」を設定することなど、指導と評価の一体化を目指す工夫を進めていきたい。

キーワード： 道徳教育、道徳の時間、評価、指導と評価の一体化、共感的理解

1 はじめに

「指導と評価の一体化」が求められ、各教科や特別活動、総合的な学習の時間においては、評価を生かした指導が具体的に進められつつある。

一方、道徳教育や道徳の時間については、評価はなじまない、関係ないといったとらえ方をされることも多く、評価について取り上げられることは少なかった。また、取り上げられたとしても、道徳性についてのアンケート調査を実施したという取組や、道徳の時間に一生懸命考えていたかどうかを子どもたちに尋ねたといった取組にとどまっているのが、これまでの状況である。

確かに、道徳教育や道徳の時間における評価には難しさがあり、慎重さも求められる。安易に、他の教科・領域における評価の方法等を取り入れることは適切ではない。しかし、学校教育において、ねらいをもって指導がなされる以上、そのねらいに基づいて評価し、ねらいを深めていく取組は大切なことである。また、子どもたちにとっても、自分自身をしっかりと見つめ、自分を高めたり、深めたりしていくことは大切なことである。

そこで、道徳教育、なかでも道徳の時間における評価をどのように考えればよいのか、また、評価を進める際にはどのようなポイントを大切にすればよいのか、どのような工夫が考えられるのかについて考察したい。

なお、道徳教育や道徳の時間にかかわる評価には、子どもに対する評価と指導計画そのものに対する評価がある。本稿では、子どもに対する評価に焦点を当てる。

2 研究目的

道徳教育あるいは道徳の時間における評価の在り方や役割、評価活動を進めるためのポイントや工夫について考察する。

3 研究内容と考察

(1) 道徳教育において評価を考えるときの基本姿勢

小学校学習指導要領には、「児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよ

う努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。」とある。また、『小学校学習指導要領解説 道徳編』には、「道徳教育における評価は、教師が児童の人間的な成長を見守り、よりよく生きようとする努力を評価し、勇気づけるはたらきをもつものであるといえる。」とある。

更に、『中学校学習指導要領解説 道徳編』には、「生徒の道徳性については、道徳教育の目標や内容に照らして、どの程度成長したかを明らかにすることが大切である。そのためには指導前や指導後の生徒の実態の把握に努め、確かな生徒理解に基づく道徳性の評価を心掛ける必要がある。」
「あくまでも生徒の道徳性の評価は、生徒が自らの人間としての生き方についての自覚を深め、人間としてよりよく成長していくことを支えるためのものである。」と示されている。

一方、文部科学省の永田繁雄調査官も、道徳の時間における道徳性の評価について慎重さが求められることの理由を次のように指摘している。

- 道徳性は子どもの内面的な問題であり、人格や生き方の全体にかかわるため、道徳の時間での把握には限界がある。
- 道徳の時間は道徳性が体験や実践的な行為として表れる場ではないので、もとよりその全体を見取ることはできない。
- 道徳の内容項目そのものが、子どもが一生をかけてはぐくむような向上目標的な趣旨をもっている。
- 道徳性は子ども一人一人が自ら発展させる個性的な生き方の問題であり、同一の観点や尺度に照らして評価することは、個性的な生き方を促す逆向きの力となりかねない。

永田調査官は、これらを踏まえながら、「数値などに頼らない評価を前向きに行っていくこと」「指導の諸方法や学習指導過程等の評価を道徳の時間の第一義的なものとする」とらえ違いや、子どもの学習状況の変化を道徳的実践力の変化や日常の道徳的行為や行動の変容と直結させるとらえ違いをしないようにすること」を指摘している。

道徳教育や道徳の時間では、数値による評価を避けるとともに、内面的な評価には限界があることを押さえておくことが大切である。

しかし、考えてみれば、道徳教育の取組や道徳の時間の学習は、評価そのものではないだろうか。なぜなら、道徳教育を進めていく上で、教員は子どもの見方や感じ方、考え方を理解しなければ始まらないからである。また、授業中も、教員は子どもの発言や表情、うなずきなどから、その思いを懸命に理解しようとしているからである。

更に、子どもに至っては、資料の登場人物やクラスの友達や教員の意見や考えを「どんな思いでいたのだろうか。」「あの子の意見はどういう考えに基づくんだろう。」と懸命に理解しようとする。そして、更に、自分の考えの変化に目を向け、新たに見えてきた自分を見つめる。これらはまさに、他者評価や自己評価である。

つまり、道徳教育や道徳の時間においても、評価は大切な活動なのである。

ただし、ここで述べる「評価」は、子どもを理解する営みとしてとらえなければならぬ。従前の「評価」は、対象とするものの値打ちを計るものとしてとらえられがちであった。いわゆる「下す評価」である。「下す評価」である限り、それは数値による評定と同じ発想であり、身に付いたかどうかを判定するという教員中心の評価に陥ってしまう。これでは、子どもの成長を見守る評価になることはあり得ない。

そうではなく、道徳教育や道徳の時間における評価は、あくまでも子どもを理解する営みとして

とらえたい。子どもの思いや考えをしっかりと理解しつつ、子ども自身が見方や感じ方、考え方をより一層広げたり深めたりできるよう導くのである。したがって、道徳教育や道徳の時間での評価は、受容的姿勢に支えられた「共感的理解」ととらえることが大切となる。

なお、このことは、子ども自身が行う「評価」でも同様で、資料の登場人物やクラスの友達や教員、更には自分自身の見方や感じ方、考え方を理解するという意味での「評価」である。

また、人を理解するには、プラス思考で行うことも大切なことである。というのも、プラス思考による理解は、その人を可能性をもった存在として尊重し、その可能性を引き出そうとする姿勢で行うからである。一方、マイナス思考は、できないところや足りないところを見付ける姿勢になりがちである。子どもを可能性をもった存在としてとらえ、よりよい生き方を目指して共に歩むことを目指す道徳教育や道徳の時間においては、プラス思考が大切であることは言うまでもない。

こうして子どもに対するプラス思考での理解が進む中で、それが指導に生かされ、子どもの成長を支え、励ましていくものになるのである。いわゆる、指導と評価の一体化が実現するのである。

以上のことから、道徳教育や道徳の時間における評価を進める際には、次のことを大切にしたい。

- 評価とは、子どもの見方、感じ方、考え方をプラス思考で理解する営みであるととらえる。
- 受容的な姿勢で共感的理解を大切にしながら、様々な機会や場面での評価を進める。
- 評価の限界を前提にするとともに、そもそも評価や指導は子どもの成長を見守り、支え、励ますものであるととらえる。

なお、子どもに対する評価では、日常的に行う評価と道徳の時間にかかわる評価が考えられる。また、道徳の時間にかかわる評価では、事前、事中、事後の評価が考えられる。日常的に行う評価と道徳の時間の事前、事後の評価は、重なる部分が大い。というのも、道徳の時間の事前、事後の評価は、授業の直前や直後の評価ではなく、日常の生活の中の様々な機会や場面の中で行っていく必要があるからである。

以下、本稿では、道徳の時間の中で行う評価に焦点を当て、考察していきたい。

(2) 道徳の時間における評価のポイントと工夫

道徳の時間における評価については、永田調査官も述べているように、指導や計画の評価を第一義としたり、学習状況の変容を道徳性の変容ととらえたりすることのないよう心がけることが大切である。また、道徳の時間だけで人間性全体の評価をしようとすることも避けなければならない。

では、道徳の時間の評価をどう考えればよいのだろうか。

道徳の時間は、ねらいに基づいて進められる。そのねらいを深めるためには、一人一人の子どものことを理解し、より深まりが得られるような指導を展開していくことが大切になる。つまり、道徳の時間の評価は、ねらいを深めるための大切な営みとしてとらえたい。

したがって、道徳の時間の評価は、ねらいの設定と分析からスタートすることになる。

ア 道徳の時間のねらいの設定と分析

道徳の時間の学習が深まり、子ども主体の授業となるためには、授業のねらいを抽象的なとらえ方で設定するのではなく、子どもの言葉でねらいを考え、発問に対する子どもの意識を予想しておくことが大切である。このことは、評価を考える際にも大変重要なことである。

つまり、ねらいを踏まえながら子どもの意識を予想し、それに基づいて指導や評価を進めていくのである。これは、言い換えれば「評価規準」の設定とも考えることができる。ただし、道徳教育

や道徳の時間の場合、その時間や場面だけで評価することは難しいことや、行為ではなく心の内面を評価すること自体が不可能であること、一定の規準による評価は避ける必要があることなどから考え、「評価規準」という用語を道徳教育や道徳の時間にもち込むことは避けるべきである。

しかし、ねらいを踏まえながら子どもの意識を予想し、授業の中でしっかりと子どもへの理解を深めることは大切なことである。

例えば、初めての地に旅行したときのことを考えてみよう。あらかじめ、その地の名所や名物を知りながら訪れるのと、何も準備しないままに訪れるのでは、大きな違いがある。前者の場合、その地のよさにより多く出会うことができる。一方、後者の場合は、その地のよさに気付かず見過ごしてしまうことが多くなる。

このことを授業に置き換えると、子どもの意識を予想するからこそ、子どものよさがしっかりと見えてくるといえる。予想することは、一定の考え方を教え込んだり押し付けたりすることにつながるという誤解があるかもしれない。しかし、予想することと教え込んだり押し付けたりすることとはまったく別のことである。予想することは、まさに期待することであり、よさに気付くチャンスをつくることなのである。また、予想するからこそ、予期せぬ意見や考えが子どもから出されたとき、そのよさに気付くことができるのである。

次に、ねらいを分析する際には、道徳の指導内容にかかわって育ちの見通しをもつことが大切である。小学校低学年から中学年、高学年、中学校とどのような育ちを期待するのかを見通しながら、授業のねらいをしっかりとつことが大切である。特に、道徳の時間のねらいは、抽象的な表現になりがちで、例えば、小学校の中学年と中学校でほとんど違いがないといった場合さえみられる。これでは、ねらいが形骸化し、指導も評価も具体的に進めることができなくなる。育ちの見通しをもちながら、違いを整理することが大切である。次の例は、中学校2年生の主題名「集団生活の向上（指導内容4－(1)）」、資料名「明かりの下の燭台（「自分を考える」あかつき）」の授業を構想するに当たって、指導内容を道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践意欲・態度を観点として分析したものである。

表1 ねらいの分析（渋谷(平18)より)

	小学校高学年 4－(1)	中学校 4－(1)
	身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	自己が属する様々な集団の目標や立場についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
道徳的心情	自分も集団の一人であるという存在感をもっている。	集団として達成した喜びを、一人一人の喜びとして感じている。 ・ チームみんなで達成したことがとてもうれしい。
道徳的判断力	自分の役割と責任を果たすことで、集団に役立つことができると考えている。	一人一人がそれぞれの集団の目標や立場を理解し、自分で役割を考え、その役割と責任を果たすことで、集団の目標を達成することができると考えている。 ・ 自分の役割を果たすことで、チームが向上できるんだ。
道徳的实践意欲・態度	集団の中で、自分に与えられた役割をもっと果たそうと思っている。	自分の属する集団の中で、生活の向上のために自分はどんな役割を果たすことができるかを考え、それを果たそうとしている。 ・ 自分の得意なことで、チームを支えていきたい。

このように分析したことによって、小学校では「集団の一員として与えられた役割をしっかりと果たす」ことの大切さに注目するのに対して、中学校では「どんな役割が必要かを自分で考えるこ

と」に注目するという違いを整理することができ、ねらいの設定をより具体的に考えることができた。本授業では、生徒の実態も考慮しながら、次のようなねらいが設定されている。

一人一人が集団の中の自分の役割や責任を果たすことで集団生活が向上するとともに、その際の集団としての充実感や達成感は個人としての充実感や達成感にもつながることに気づき、集団の一員として集団生活の向上に努めようとする意欲を高める。

イ 道徳の時間の展開での工夫

道徳の時間のねらいを、子どもの心の育ちで系統的にとらえ、ねらいを子どもの意識で具体的につかんだ上で、次は、授業の展開を考えることになる。

展開を考えるに当たって、評価に関しては、それぞれの場面で「評価のポイント」「評価方法」「更に考えを深めさせたい子どもへの支援」を明らかにしたい。

先に述べた授業で、授業者は次のような主発問と予想される生徒の意識を考えた。

なお、本時で用いた資料「明かりの下の燭台」は、東京オリンピックのバレーボール日本チームのマネージャーであった鈴木恵美子のことを当時の大松監督が語った話である。選手としてプレイすることを願っていた鈴木は、監督からマネージャーとしてチームのために働くことを求められた。悩んだあげく、鈴木はマネージャーを引き受け、4年間、何の愚痴も言わずその役割を果たしていく。やがてチームは、金メダル獲得という目標を達成することができた。そこには、選手と同じように充実感や達成感を味わう鈴木恵美子の姿があった。鈴木恵美子は、個人としての「充実感・達成感」という喜びと、集団としての「充実感・達成感」という喜びの両方を感じることができたのである。それを可能にしたのが、一つの目標に向かう集団の一員としての自覚と自らの役割や責任の遂行であった。

◎ チームが勝つこと、そのことが喜びであり、4年間が楽しかったと感じることができたのはなぜだろう。

- ・ マネージャーという仕事が自分に合っていたから。
- ・ みんなが感謝してくれたから。
- ・ マネージャーとしての仕事をやり遂げ、満足だったから。
- ・ チームの中でマネージャーはなくてはならない存在だと、自分で気付いたから。
- ・ みんなで金メダル獲得という目標を達成できたから。
- ・ チームの一人として、金メダルをとることに貢献できたから。

ここでは、鈴木の思いに共感し、彼女が充実感や達成感を集団と個人の両方で感じていることや、集団の中での自分の役割に気付いていることを、子どもたちとともに話し合うのが学習の中心となる。そこで、次のような「評価のポイント」を設定した。

- ・ 満足
- ・ やり遂げる
- ・ みんなで
- ・ チームの一人として

こうして、「評価のポイント」を考えることで、子どもたちの意見やつぶやきを見過ごすことなくとらえ、立ち止まって考え合う授業が実現した。

なお、ここでの「評価の方法」は、ワークシートの記述、発言、表情等である。

また、「更に考えを深めさせたい子どもへの支援」が、評価を生かす最も大切な部分である。こ

ここで授業者は、次のような補助発問を用意した。

「金メダルをもらっていないのに喜んでいるのはなぜだろう？」

「鈴木恵美子さんの喜びって、どんな喜びだろう？」

「鈴木恵美子さんが、個人としての喜びとチームとしての喜びの両方を感じることができたのはなぜだろう？」

評価は、指導と一体化したものでなければならない。特に、深まりや広がりのある授業を実現するためには、子どもの思いや考えをしっかりと理解し、深めたり広げたりするための支援を講じることが大切である。そのために、「更に考えを深めさせたい子どもへの支援」を考えるのである。

実際の授業においては、生徒から、次のような発言があった。

《個人としての喜び》

- ・ やりがいを感じたから
- ・ みんなが感謝してくれたから
- ・ 自分を必要としてくれるから
- ・ みんなが頼りにしてくれるから
- ・ みんなと過ごせたから
- ・ 自分ではなくてはならない存在だから
- ・ チームが勝つ姿をずっと見る事ができたから

《集団としての喜び》

- ・ チームが金メダルをとった
- ・ みんなと一緒にがんばった
- ・ チームのために働いた
- ・ チームがだんだん強くなった
- ・ 一緒に優勝した

このような発言からも、深まりや広がりのある内容になったことが分かる。授業者自身も、「ねらいを生徒の意識で考え、評価のポイントを具体的に想定したことで、生徒から出された様々な考えをうまく整理することができた。」「更に考えを深めるための補助発問を用意していたことで、焦ることなく生徒の意見をじっくり待つことができた」と述べている。

4 おわりに

評価は、決して評価のための評価となってはならない。道徳の時間における評価も、あくまでも、ねらいを深めるための評価であり、指導に生かす評価、すなわち指導と一体化した評価でなければならない。道徳の時間において評価を考えることにより、次のような効果を得ることができた。

- 授業のねらいがはっきりし、授業に深まりや広がりが出てきた。
- これまでの道徳授業は、ややもすると発言する子どもを中心に進めがちであった。しかし、評価を大切にし、更に考えを深めたい子どもへの支援を考えることで、すべての子どもが参加できるような道徳の時間へと変わってきた。
- 子どもの意見をじっくりと待ち、子どもと共に立ち止まって考え合う授業ができるようになった。

参考・引用文献

- | | | | |
|-----|--------------------|------|---------------|
| (1) | 小(中)学校学習指導要領解説 道徳編 | 文部省 | 平11 |
| (2) | 評価を指導に生かす道徳の学習指導 | 永田繁雄 | 初等教育資料11月号 |
| (3) | 生徒の心に響く道徳の時間の工夫 | 渋谷美奈 | 奈良県立教育研究所研究集録 |